

教員と中学生のダンスに対するジェンダー・バイアス

酒向 治子・永田 麻里子*・出原 智波**・角南 順子***・猪崎 弥生****

Keywords: ダンス, ジェンダー・イメージ, ジェンダー・バイアス

1. はじめに

日本の体育教育の中で、長い間ダンスは主として女子生徒、武道は男子生徒に履修するものと位置づけられていた。1989年の学習指導要領改訂以降、制度上は男女同一カリキュラムが確立されたものの、実態は依然として男女別のカリキュラムが引き継がれることが多かった。芹澤・田原(2009)は神奈川県・愛知県・岡山県・広島県の国立・公立・私立中学校を対象に2003年に行った「保健体育科の授業の実施状況」に関する調査において、サッカーおよび武道は男子に ($p<0.01$)、ダンスは女子に開設されることが多い ($p<0.01$) と報告している。また、ダンス授業を指導する女性教員の比率は72.1%と、指導する教員の性別に大きな偏りがあることも報告している。さらに実施率に比例するように、芹澤が2005年に神奈川県・愛知県・広島県の公立中学校6校の2年生男女各50名の計600名を対象に実施した調査では、「体育で行いたくない運動種目」としてダンスは女子が30.40%・男子66.78% ($p<0.01$) となっており、性別による授業カリキュラムの区分は、男女生徒の運動種目への意欲に影響を及ぼしている可能性を指摘している¹。今年度(2012年度)からの中学校1・2年生のダンス・武道の必修化は、性別が限定されたそれらの運動領域の在り方に決定的な変革を迫るものと考えられる。そして変化に付随して

浮き彫りになる課題として、男子生徒を対象としたダンス教材および指導法の開発、また教員側の課題として実技・指導経験の乏しい教員(特に男性)の指導力の養成などが挙げられるだろう。

上記の課題を追求する上で最大の壁となるものの一つが、長年培われてきたダンスに関する生徒・教員両側の性差意識である。石井は1990年代初期に高校教員を対象に行った調査において、ダンスが女性的であるというイメージが強いことを報告し、「男女共修のダンス学習は、ダンス＝女性的というイメージを否定的に変容させるように、運動を楽しく体験させダンスそのものに対する性差を排除していくような学習内容の課題を設定する必要がある」(石井, 1993) と述べている。このダンスに対する偏った思い込みやイメージ(本稿では性別による偏見を意味する用語として「ジェンダー・バイアス」とする)に関して、一つの疑問が浮かび上がる。それは、時代の変遷と共にダンスに対するジェンダー・バイアスは教師・生徒とまったく変化がないのかという点である。1990年代と比べると、選択制の導入に伴い学校教育における男子生徒がダンスを試みる機会が増えている。また、TVなどのメディアではヒップホップの興隆に伴い男性ダンサーを目にする機会も激増している。生徒・教員共に「ダンス＝女性的」と見なされる傾向にあったダンスのジェンダー・イ

岡山大学大学院教育学研究科 生活・健康スポーツ学系 保健体育講座 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

* お茶の水女子大学 112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

** 岡山市立操山中学校 703-8236 岡山市中区国富3-1-1

*** 岡山市立操山中学校 703-8236 岡山市中区国富3-1-1

**** お茶の水女子大学 112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

Gender Bias in Dance of Teachers and Junior High School's Students

Haruko SAKO, Mariko NAGATA, Chinami IDEHARA, Junko SUNAMI, Yayoi IZAKI

Physical Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

* Ochanomizu University, 2-1-2 Otsuka Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610

** Misaoyama Junior High School, 3-1-1 Kunitomi, Naka-ku, Okayama city 703-8236

*** Misaoyama Junior High School, 3-1-1 Kunitomi, Naka-ku, Okayama city 703-8236

**** Ochanomizu University, 2-1-2 Otsuka Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610

メージは徐々に変化している可能性が考えられる。中村恭子は日本の舞踊教育を牽引してきた雑誌『女子体育』の2010年の巻頭言において次のような示唆に富むメッセージを発している。

「現代の子どもたちは踊ることへの抵抗がほとんどなく、ダンスを『楽しい』『カッコいい』『自由な』運動とイメージし、性差は意識しないのである。これからのダンス教育と対峙して意識を変えなければならぬのは教員の方ではないだろうか。」(中村, 2010)

中学校におけるダンスの男女必修化という大きな転換点をむかえた今、今後の教材・指導法開発を模索する土台として、ダンスに対する教員・生徒のジェンダー・バイアスについて、もう一度改めて問い直す時期に来ているといえる。

2. 目的

本研究では現役教員と中学生に質問紙調査を行い、現在のダンスのジェンダー・バイアスについて検討する。これによって、ダンス教材や指導法開発の土台となる基礎的資料を得ることを目的とする。

3. 方法

3-1. 教員を対象にした質問紙調査

実施日 2012年8月20日, 25日

対象者 小・中・高の教員20代から50代の男女計61名。男女の内訳を表1に示す。

	男性	女性
20～29歳	9(40.9%)	13(59.1%)
30～39歳	3(21.4%)	11(78.6%)
40～49歳	4(20.0%)	16(80.0%)
50～59歳	0(0%)	5(100%)
	16(26.2%)	45(73.9%)

調査項目 1. 年齢を聞く項目, 2. 性別を聞く項目, 3. 教員歴を聞く項目, 4. 教員養成機関におけるダンス実技履修の有無を聞く項目, 5. 人前でダンスをすることに對する抵抗感について聞く項目, 6. ダンスは「男性的なイメージ」か「女性的なイメージ」かについて聞く項目, 7. ダンスを指導するうえで気づいた点について自由記述を求める項目の合計7項目。今回の分析では、2, 5, 6の項目のみ用いる。

手続き ダンス指導の研修前に、指導者が質問紙を被験者に配布し、研究の趣旨を説明した上で回答を求めた。調査票への記名は求めて

いない。また、調査票の冒頭、回答結果は研究に利用するのみで、他の目的に使用しないこと、回答結果はすべて統計的に処理しプライバシーが漏れることはないことを明記した。

3-2. 中学生を対象にした質問紙調査

実施日 2012年10月28日

対象者 A中学校に在籍する1年生の男女計103名。男女の内訳を表2に示す。

	男子	女子
Bクラス	8(53.3%)	7(46.7%)
Cクラス	16(50.0%)	16(50.0%)
Eクラス	13(41.9%)	18(58.1%)
Gクラス	14(56.0%)	11(44.0%)
	51(49.5%)	52(50.5%)

調査項目 1. 性別を聞く項目, 2. 体を動かすことに関する項目, 3. ダンスをすることに對する項目, 4. ダンスを観ることに對する項目, 5. 人前でダンスをすることに對する抵抗感について聞く項目, 6. ダンスは「男性的なイメージ」か「女性的なイメージ」かについて聞く項目, 7. ダンスと聞いてイメージするものについて自由記述を求める項目の合計7項目。今回の分析では、1, 5, 6の項目のみ用いる。

手続き 初回ダンス授業前に、担当教員が質問紙を被験者に配布し、研究の趣旨を説明した上で回答を求めた。調査票への記名は求めていない。また、調査票の冒頭、回答結果は研究に利用するのみで、他の目的に使用しないこと、回答結果はすべて統計的に処理しプライバシーが漏れることはないことを明記した。

4. 結果と考察

4-1. ダンスに対するイメージおよび抵抗感

4-1-1. ダンスに対するイメージ

ダンスに対するイメージについて「女らしい」1点、「どちらかといえば女らしい」2点、「どちらかといえば男らしい」3点、「男らしい」4点とし、性差についてt検定を行ったところ、教員においては有意な差は認められなかった(全体平均2.02)。平均値をもとに推定すれば、男女ともにどちらかといえば女性的であると思っていると云える。一方、

表3. 教員および中学生のダンスに対するイメージと抵抗感

	現役教員				t値	n.s	中学1年生				t値
	男性(n=16)		女性(n=34)				男子(n=51)		女子(n=52)		
	平均	SD	平均	SD			平均	SD	平均	SD	
ダンスに対するイメージ	1.88	.50	2.09	.45	1.51	2.63	1.13	1.98	.61	3.60 *	
ダンスに対する抵抗感	2.75	.86	2.68	.95	.26	3.18	1.01	2.54	.94	3.32 *	

* $p < .01$

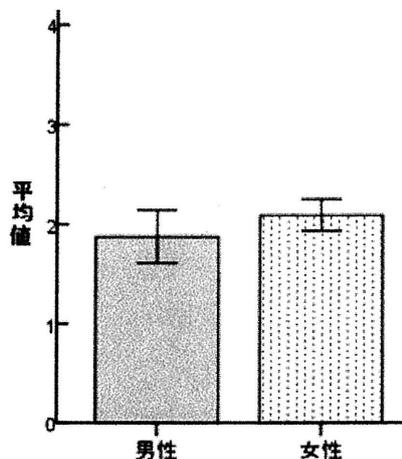


図1. 教員のダンスに対するイメージ

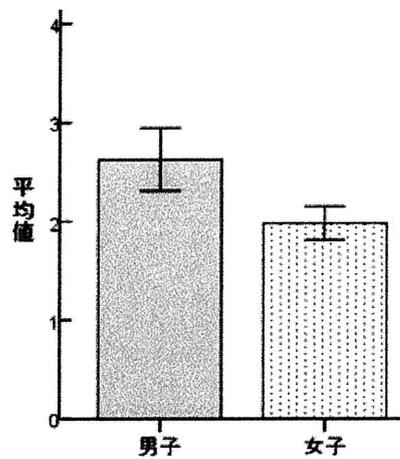


図2. 中学生のダンスに対するイメージ

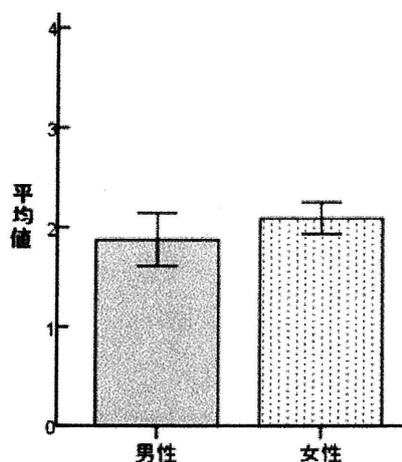


図3. 教員のダンスに対する抵抗感

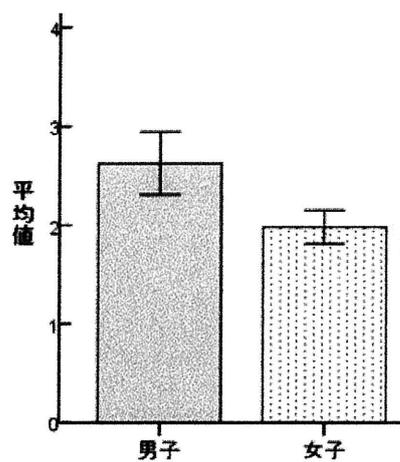


図4. 中学生のダンスに対する抵抗感

中学生においては有意な差が認められた。すなわち、男子2.63、女子1.98であり、平均値をもとに推定すれば、男子はどちらかといえば男らしいと思っているのに対し、女子はどちらかといえば女らしいと思っていると言える（表3、図1、図2）。

ちらかといえば抵抗感を持っていると言える。一方、中学生においては有意な差が認められた。すなわち、男子3.18、女子2.54であり、平均値をもとに推定すれば、男女ともに抵抗感を持っているが女子は男子ほど持っていない（表3、図3、図4）。

4-1-2. ダンスに対する抵抗感

人前でダンスをすることについて「抵抗はない」1点、「どちらかといえば抵抗はない」2点、「どちらかといえば抵抗がある」3点、「抵抗がある」4点とし、性差についてt検定を行ったところ、教員においては有意な差は認められなかった（全体平均2.70）。平均値をもとに推定すれば、男女ともにど

4-1-3. ダンスに対するイメージと抵抗感との関係

男女別にダンスに対するイメージと抵抗感との相関関係を調べたところ、教員においては男女に違いが認められた。女性は負の相関があるのに対し（ $r = -.428, p < .05$ ）、男性は相関がなかった（ $r = -.078, n.s.$ ）（表4）。

表4. 教員(女性)のダンスに対するイメージと抵抗感の相関

	相関係数	
	1	2
1. ダンスに対するイメージ		
2. ダンスに対する抵抗感		-.428 *

* $p < .05$

すなわち、女性はダンスに対して女性的なイメージを持っているとダンスをすることに抵抗感がある。一方、中学生においては、男子 ($r=.006$, n.s.) 女子 ($r=.258$, n.s.) とともに相関は認められなかった。

5. 討議

5-1. ジェンダー・バイアス, 抵抗感について

調査の結果、教員は男女共にダンスをどちらかといえば女性的なものを見なしていることが明らかとなった。一方、中学生の側では、男子と女子でダンスについてのジェンダー・バイアスが異なる結果が出ている。女子生徒は教員と同様にどちらかといえばダンスを女性的なものを見なしているのに対し、男子生徒はどちらかといえばダンスを男らしいと見なしているのである。つまり、本調査の結果から導かれる点として、教員のダンスに対するジェンダー・バイアスが未だ根強いものに対し、中学生は女子と男子生徒はジェンダー・バイアスに差が見られ、女子は従来型のジェンダー・バイアスの図式でダンスをイメージするのに対し、男子はむしろダンスを男性的なものとして見るという逆転現象が起きていることが指摘できる。

ダンスへの抵抗感については、教員と中学生の双方とも男女を問わずダンスについてはどちらかといえば抵抗感を持っているという結果が出ている。また、ダンスのイメージと抵抗感の関係では、女性教員はダンスに対して「女性的なイメージを持っているとダンスをすることに抵抗感がある」という結果が出ているものの、男性教員および男子生徒には負の相関は認められなかった。従来の舞踊教育では、ダンスをすることの抵抗感を、ダンスのジェンダー・バイアスと結び付けて語られる傾向にあった。すなわち、「ダンス＝女性的という偏ったイメージが、生徒のダンスへの抵抗感を生み出している」という言説である²。しかし、今回の調査結果で男子生徒を見てみると、ダンスは「どちらかといえば男らしい」と思っており、ダンスへの抵抗感が高い(平均値3.18)。これは、ダンスへの抵抗感の理由として、単純にジェンダー・バイアスに帰結することができないことを意味している。「男らしい/女らしい」というジェンダー・バイアスと、実際に「やりたい/

やりたくない」という思いとの間隙は大きい可能性があり、これは特にダンスに限らず全ての体育種目にあてはまるのかもしれない。ダンスについては男子のジェンダー・バイアスが変容しつつあるからこそ、いったんジェンダー・バイアスと切り離れたうえでダンスへの抵抗感についてより掘り下げた考察を行う必要性があるのではないか³。

5-2. 本調査がダンスの教材・指導法開発に与える示唆について

教育という場における教員のジェンダー意識が生徒に与える影響は強く、ジェンダーの再生装置となりがちであることは、ジェンダーという切り口から体育・スポーツを分析した論考によって既に指摘されてきている⁴。教員側に「ダンス＝女性らしいもの」、そして「中学生もそのように見なしている」という無意識的な思い込みがあったとすると、教材や指導法の細かな部分でその影響が表れ、生徒をミスリーディングしてしまう危険性がある。学校教育におけるダンスの授業では、教員と中学生の両側のジェンダー・バイアスとダンスをすることへの抵抗感が複雑に錯綜した場となりつつあることを明確に認識しておく必要があるだろう。

中学生の男子にとって「ダンス＝男らしい」というイメージが生じたとすると、それは何故なのか、「はじめに」で触れたようなメディアを通じたダンスの在り方の視覚的影響によるものなのか、理由は定かではない。従って今後の重要な検討課題となるだろう。また、教員・中学生双方の調査対象人数を増やした追加調査を行い、本調査で得られたダンスにおけるジェンダー・バイアスの傾向についてより明らかにしていきたい。

[付記]

本研究は、科研費(22310160)および科研費(24700623)の助成を受けたものである。

引用文献

¹ 芹澤, p.616.

² 秋葉尋子(1982)は、男性としての役割が明確ではない種類の舞踊を行うことに対して抵抗感を抱く

としている。

³ 舞踊教育の先行研究においては、ダンスへの抵抗感は特に「恥ずかしさ」に結び付けて語られてきた（麻生，1988）。佐藤（2007）はディスコなどクラブ以前の踊り場における「恥ずかしさ」を、「その場が要求するダンスが踊れない，つまりその場の状況に合った外的自己を提示できない」（p.58）とし，作田（1976）の恥ずかしさの分類に依拠して「公恥」，クラブという踊り場で顕著となる「恥ずかしさ」を「自分だけの価値判断に大きく負う恥ずかしさ」（p.59）の「私恥」であると踊り場の質による「恥ずかしさ」の形態が異なるとして考察している。それでは，ダンスをすることの抵抗感が必ずしもジェンダー・バイアスに直結しないとした場合，学校の体育における「踊り場」にはどのような「恥ずかしさ」の形態が見られるのかという問いが生じる。

⁴ 飯田貴子・井谷恵子編著（2004）。

参考文献

秋葉尋子（1982）「子どもがまったく興味を示さない，

特に恥ずかしがってやらない子が多いのだが」『体育科教育』30（6）：50-52.

麻生和江（1988）「表現運動・創作ダンスの学習における「恥ずかしさ」について」『大分大学教育学部研究紀要』10（2）：331-339.

飯田貴子・井谷恵子編著（2004）『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店.

石井千代江（1993）「男女共修のダンス学習に関する基礎的研究 III」『日本体育学会大会号』780.

佐藤生美（2007）「踊り場における『恥じらい』のコミュニケーションクラブでのダンスにおける「私」の身体提示—」『コミュニケーション科学』27：51-72.

作田啓一（1976）『恥の文化再考』筑摩書房.

芹澤康子（2009）「体育授業に見るジェンダー・バイアス」『体育の科学』59（9）：614-617.

中村恭子（2010）「変わるダンス教育と子どもたち」『女子体育』52（6）：4-5.